親鸞における一心と一念

石原 斌 夫

一 『入出二門偈』の一心

親鸞の著作には、一念より一心の方がやや前面に出ている。親鸞における一心の出典は『浄土論』の『願生偈』である。その偈文の第一句の「世尊我一心」がそれである。所謂「論主の一心」である。親鸞は世親『浄土論』と曇鸞『浄土論註』に感銘している。然し親鸞が本願念仏の根拠とする本文と本願成就文は、一念（十念）を語るのみである。このため親鸞は、初めは一心が中心であったが、後に一念との関係を考えるに致り、遂に一心と一念の同等性に達するに至っている。今回はその過程を追って見る。

先づ親鸞の初期のものと思われる『入出二門偈』を見る。

題名の通り世親『浄土論』の五念門の入四門と出第五門を曇鸞・道綽の目を通し、その上に自己の本願観を樹立しようとする意欲を示したものである。「一心帰命不可思議光如来」「一心専念速満足」「一心専念願生彼」「以斯信心名一心」「一

心淳心名如実」の五句である。いづれも阿弥陀如来に対する称名念仏の在り方を「論主一心」によって述べている。「世尊我一心、帰命十方無礙光如来、願生安樂国」は、親鸞にとって「世親の心」の全てであった。この段階では「世親の心」に共感し、その心を整理する目的があったものと思われる。然し、先にあげた五句の中の二句は、一心専念となつている。一心は信、専念は行というのが親鸞の解釈であるが、『二門偈』の場合は一心と専念が果して信と行というように分別されていたか定かでない。一心は無二の心で、専念は単に想念に過ぎないのかも知れない。

二 『愚禿鈔』の一心と一念

『愚禿鈔』上巻の最後に『観経疏』の『帰三宝偈』の十一句がある。その中に「相応一念後」がある。続いて『願生偈』の八句がある。その中に「世尊我一心」がある。この一念と一心の関係はここでは認められない。次の『愚禿鈔』下

卷は善導の「三心釈」の抜粋である。『観經』三心の深心釈の抜粋の中に、五正行に対する一心が記されている。五正行に一心専念することを念頭に記したものとされる。続いて五正行を正定業と助業に分け、正定業を「一心専念弥陀名号」とし、次の廻向発願心釈の項では「二河喩」の中の「一心正念」の解釈を述べている。「一心」と「専念」及び「一心」と「正念」の思索は、一心と一念の関係を近づける契機をなすものと思われるが、親鸞は未だこれに気付くには致っていない。「入出二門偈」の場合と同じである。「愚禿鈔」では一心と一念の間の関係の萌しを示したに止まっている。

三 『文類聚鈔』の一心と一念

『文類聚鈔』前半の「行の項」において本願成就文を引用しているが、その文中の「乃至一念」については専念・一声・称名・憶念・正念・正業といっているから「一念」は称名行為のことである。又、名号を聞いて歓喜して次の称名行為に移る時間的瞬間を意味するとも言っている。いづれにしても『聚鈔』前半の一念の解釈は行一念に止まり信一念には及んでいない。一心については『願生偈』の「我一心」即ち「論主の一心」の引用はあるが、その考察はない。『聚鈔』後半は本願三心の釈である。目的は本願三心と論主一心との関係を求めることにある。従って三心即一心釈と言うべきか

親鸞における一心と一念(石原)

も知れない。この釈文は本願三心の中から清淨真實疑蓋無雜を理由として、一心を引出している。かくして本願三心のそれぞれに内在するのは無疑の一心であるとして三心即一心釈を結んでいる。この三心即一心の結論に引続いて『散善義』の「三心釈」の中の「一心正念直来」という如来招喚の声を取り上げてその解釈を述べて、三心即一心を再確認している。そして「三心一異釈」を展開し、「一心専念弥陀名号」の心

相から一心即信心、専念即正業を引出している。即ち一心は信心であり、一念は称名である。一心と一念は一応別概念である。「往相の心行」と言った場合の「心行」の心は一心であり、行は一念である。従って『聚鈔』で心行というのは、善導の一心専念・専心専念また一心正念と同義で一心一念という意味である。『教行信証』では行信となる。『聚鈔』の思索はここまでである。

四 『教行信証』の一心と一念

『教行信証』においては、一心と一念の関係は明確であるが、それについては、一念の扱いが『聚鈔』と異った面がある。『聚鈔』では一念は行信未分化であるというより、むしろ行一念の意味となっている。『教行信証』では『行巻』は行一念、『信巻』は信一念と使い分けている。一心と一念の関係は『信巻』では、論主一心と願成就一念は同義であると

考えられている。三心一心釈において本願三心は、疑蓋無雜を理由として真実の一心であると確認している。次に信樂一念を本願成就文から引出し、善導の一心専念・専心専念を仲介として成就文の再検討をしている。論主一心と成就一念の関係は、成就一念の分析によって求められている。成就一念は「二心なき一心」というのが一念即一心の根拠である。これを願成就一念の釈にまともてている。然し、この釈の中には曇鸞・道綽の「三信」の思索が影として入っていると思える。それは既に『聚鈔』の「一心正念」の釈の中に見られ、『念仏偈』には「三信相応是一心」とあるからである。然し、この「三信」は淳心・一心・相続心の三心であるから本願三心ではない。とは言えこれは本願三心即論主一心への思索と無関係であったとは思えない。淳・一・相続の三心が一心に集約されると言う発想が、本願三心の中に疑蓋無雜な一心を見出すと言う発想に共通面を持っているからである。

以上、願成就の一念は「信心二心なき一心」と言う解釈を経て「一心」と言う意味に切り替えられている。『聚鈔』では行一念であったのが、『信卷』では信一念となっている。かくして論主一心即願成就一念という関係は成立した。

では『行卷』の行一念はどうなっているか。それは『行卷』で「弥勒付属の文」の中の一念と解釈することで落着いている。信一念が信心歓喜の一念であり、行一念は踊躍歡喜

の一念と言うことである。「三心即一心釈」において、最初は本願三心と論主一心の総合が目的であった。成就一念はこの段階では行一念の意味であった。ところが本願三心と本願成就文との直接的関係を求める段に至り、成就一念は信一念の意味となった。そこで行一念の根拠は本願成就文を離れて、弥勒付属文の一念に求めることになった。『聚鈔』においては本願成就文と弥勒付属文のいづれも行一念の根拠となっている。『教行信証』において始めて信一念が成立した。それによって願成就文・弥勒付属文の二文は、それぞれ『信卷』と『行卷』にその所属を分けた。

五 『三経往生文類』の一心と一念

『教行信証』に致って、一念は行と信とに分化し、一心は信一念のことになった。然し『三経往生文類』（広本）においては、諸仏称名願成就文と本願成文とを分けられない形のままにして、これを「称名信樂悲願成就の文」と名銘している。「行の願成就の文」という意味である。行信総合の立場になっている。つまり、「成就の一念」は「行の一念」と「信の一念」の二義を持つことになっている。又、論主一心は出ていない。『三経往生文類』は『浄土三部経』の範囲内での親鸞の思索のまとめであるから、論主一心は出していないと考えられるのである。

（祖父江高校教諭）